

会 告

二〇〇五年度史学研究会大会および総会は、予定通り、一月二日（火）午後一時より京大会館にて開催されました。

公開講演は泉拓良、石川禎浩の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

フエニキア・テュロス遺跡発掘調査の成果——ヘレニズム〜ローマ時代を中心に——

泉 拓良 氏

死後の孫文——遺書と記念週

石川禎浩 氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、二〇〇五年度会務報告がなされました。

二〇〇五年度

史学研究会大会講演要旨

フエニキア・テュロス遺跡発掘調査の成果——ヘレニズム〜ローマ時代を中心に——

泉 拓良

一 調査に至る経過

筆者は一九九九年からレバノン共和国のティール市（現地名スール）およびその周辺で考古学的調査を実施してきた。その成果の概略を紹介する。

レバノンは、イスラエルの北、シリアの南・西に位置する東地中海に面した小国である。面積は約一百万平方キロと日本の岐阜県とほぼ同じであるが、人口は四四〇万人と多く、中東では珍しく緑豊かな国である。歴史は古く、アフリカとアジア、ヨーロッパを結ぶ回廊に位置し、一〇〇万年前の前期旧石器時代から、人類の歴史に重要な役割を果たしてきた。特に紀元前一千年期にはフエニキアの中心地として繁栄を極めた。レバノンでは、一九七五年から始まった内戦が一九九二年に終了し、一九九五年か

ら本格的になった首都ベイルートの再開発で、多くのフエニキア〜ローマ時代の遺跡が発見された。しかし、開発に先立つ発掘調査に必要な財源と人材が不足し、外国へ援助を依頼した。ヨーロッパの五カ国がベイルート再開発に伴う発掘に参加し、大きな成果を上げたが、再開発はレバノン全土へと波及するに従い、各地でも遺跡調査が必要となり、さらなる考古学的支援の要請が各国になされた。

二 遺跡確認調査の概要

日本へは、一九九八年に外務省を通じて西アジア考古学会に調査の依頼があり、国際交流基金の資金的援助を得て、国士舘大学イラク古代文化研究所の松本健教授を隊長とする調査団が作成された。一九九九年からは、世界文化遺産ティール遺跡市街地郊外に計画された高速道路とインターチェンジの予定地における遺跡確認調査を始めた。二〇〇〇年からは、泉が中心となり高速道路と市街地を結ぶ地域にまで遺跡確認調査の範囲を広げ、六五カ所で遺跡を発見・確認した。この結果、インターチェンジ予定地にローマ時代の地下墓が集中していることがわかり、遺跡保存の為、イン

ターチェンジを変更することが決まった。

成果はそれだけではなく、ラス・アル・アイン地区での前期旧石器の発見、ミシ地区での中期旧石器時代遺跡の推定、テッセラの分布による、テル・マアシューク周辺のローマ時代ヴィラの予測をおこなった。

三 ラマリ地区の発掘調査

二〇〇二年度からは、保存の決まった元インターチェンジ予定地約六万七千平方メートルでの地形測量と詳細な遺構確認調査を始めた。踏査した地域で二三基の地下墓、一二基の造り付けの石棺、広い範囲にわたる石切場遺構を発見、一部の発掘調査を行っている。

現在までの主な成果としては、ラマリ一九九番地で発掘調査した紀元後一―二世紀の入口部が縦穴の地下墓の発見と、性格不明の紀元前二世紀の遺構から出土した鉛製の分銅があげられる。

地下墓は、フェニキア時代のシャフト墓に形状が似ているが、紀元後一―二世紀の規模の小さい独り用の墓で、紀元後二世紀に一般化する「地下墓」の形態系譜を考えた上で、新たな資料を提供した。

発見した鉛製分銅には、表には一二年

（紀元前一〇五／一〇四年）という年号が、裏面にはタニット女神の記号が書かれていた。同様な分銅はすでに数例が採集品、購入品として知られていたが、発掘資料としては今回が初めての発見である。同時期の鉛製分銅は広くシリアにまで広がっているが、ラタキア・アンタキアを中心とする地域、タルトゥス周辺、ベイルートからシドンに到る地域、そしてティール周辺という地域色が確認できる。今回出土した分銅は、年号の比定と、裏面のタニット女神記号の系譜から、セレウコス朝から独立間もないテュロスが鋳造した分銅で、フェニキア時代への強い憧れを象徴していると理解している。

死後の孫文——遺書と記念週

石川 禎 浩

一九二五年三月に北京で世を去った孫文は、三通の遺書を残したとされる。国民党の同志たちへの遺書（「遺囑」）、家族への遺書、そしてソ連政府の指導者たちへの遺書である。当時、孫文の率いる国民党は、共産党員の受け入れ（国共合作）とソ連と

の積極的提携を柱とする新方針のもと、影響力を広東省から全国へと広げんとしていたが、「容共・連ソ」には、党内の反発も根強く、その新方針は孫文の強力な指導力によって、かろうじて維持されていた。孫文の遺書が政治的に大きな意味を持ったのはこのためである。

三通の遺書のうち、ソ連政府へのそれは、ソ連との長期にわたる協力関係の維持を願う文面であり、間接的に国民党員への「遺囑」を補完する内容となっていた。周知のように、国民党は孫文死後三年を出ずして、「容共・連ソ」とは全く反対の政策に立ち至ったため、同党にとってソ連あての遺書は、極めて扱いの難しい文書となった。これを反映するかのようには、これまで国民党は、ソ連あての遺書を孫文の正規の著作とは認めない立場をとってきた。具体的に言えば、台湾で刊行された孫文の全集には、ソ連あての遺書は収められていないのである。これに対して、孫文の革命事業の継承者——国民党とは別の意味で——を任じる中国共産党は、当然のようにそれを孫文の著作とみなす。大陸で刊行されている孫文の全集には、それが収録されている。

本講演ではまず、ソ連あての遺書とも密接にかかわる「遺囑」の作成過程を、できるだけ原資料に即して検討し、それが孫文の死の一月ほど前に国民党の指導部によって起草、討議されていたこと、汪精衛ら孫文の側近たちは遺書が孫文の死後に持つであろう権威性を予見し、その作成、署名の過程がいかなる疑惑も呼ばぬよう、周到に手続きを踏んでいたことを論証した。その物証となるのが、病床の孫文の前に「遺囑」原案を朗読したさいの汪精衛と孫文との談話記録（一九二五年二月二十四日付）である。

これに対して、ソ連あての遺書は、その作成過程が不明瞭であった。また、それが公表されたのも、「遺囑」と同時ではなかった。国民党側の人士が、ソ連あての遺書を孫文の正式の著作と認めない所以である。また、実を言えば、英語で書かれたとされるソ連あて遺書の原文書自体が、そもそもこれまで確認されてこなかったのだった。孫文研究者たちは、英字新聞に載ったものや中国語に翻訳された活字版をもとにして、事を論じてきたのである。

問題のソ連あて遺書の原文書は、モスク

ワの公文書館に保存されている。筆者は、その原文書に基づいて、そのスタイル（作成日付、副署者など）を分析した結果、次のような結論にいたった。① 原文書は孫文自筆のサインを持つだけでなく、国民党関係者七人の副署を持ち、形式面で孫文の著述としての条件を備えている。② その副署は、国民党の首脳たちも同文書を孫文の遺言と認知していたことを意味する。③ ただし、三月一日の日付のみを持つソ連あて遺書の形式は、二月二十四日の日付を併せ持つ「遺囑」の形式とは異なっており、それが当初より「遺囑」と同様に準備されていた文書ではなかったことを物語る。すなわち、ソ連あて遺書は、孫文の臨終の際に、こうした文書の必要性を感じた者が起草し、「遺囑」への署名に合わせてすべり込ませた文書であった。

ソ連あて遺書がこのような奇妙な作成過程を経た原因、そしてソ連あて遺書が孫文の死後にたどった運命、それらはいずれも国共両党の融和と対立、それに連動する中国とソ連の離合常ない関係を如実に反映するものだった。そして、孫文死後に確立する孫文への尊崇体制が、「遺囑」やソ連政

府あて遺書といった文書の持つ政治性、党派性をより増幅させることとなる。そうした尊崇体制は、孫文の死後間もなく、「総理記念週」という定型化した孫文記念行事を生み出したが、それは国共両党に共通する領袖個人崇拜の起源とも言うべきものであった。

二〇〇五年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇五年度大会・総会は、一月二日（水）一三時から一七時まで、京大会館において開催された。

本年からはプログラムを改め、最初に総会を行なうこととした。まず紀平英作理事長が挨拶に立ち、開かれた学会をめざして改善に取り組んでいきたい旨を述べた。ついで島居一康氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（吉川真司常務理事）からは、会員数・史林送付数について、本年度から始めた学生会員制度がひとまず順調にすべり出し、会員数の増加をもたらしたことが報告